

うり う いわ こ  
**瓜生岩子のおはなし**



社会福祉の母  
 やさしいお顔のおばあちゃん



©いわちゃん

たくさん助けました  
 遠く東京でも活躍した  
 岩子の生涯を  
 ひもといてみましょう

岩子は喜多方で生まれました  
 戦争や飢饉で貧しい時代に  
 困っている人を

喜多方市  
**瓜生岩子刀自顕彰会**

事務局：〒966-8601 福島県喜多方市字御清水東7244番地2  
 TEL 0241-24-5257 (喜多方市役所 保健福祉部 社会福祉課内)

岩子の功績に思いをはせて  
**瓜生岩子の  
 喜多方史跡めぐり**



**アクセス**

- ①示現寺** 喜多方市街地から県道333号線を熱塩方面へ約11 km、熱塩温泉街奥
- ②長福寺** 喜多方駅から県道16号線を北へ道なりに約2km進み、左手に④北町公園のあるT字路を左折そこから約400m先を左折、道なりに約1.3km進み左手に案内板があるところを左折約200m
- ③誕生の碑** 喜多方駅から北方向へ県道16号線を道なりに約2km進んだT字路、北町公園向かい道路沿い
- ④北町公園** 喜多方駅から北方向へ県道16号線を道なりに約2km進んだT字路の左側  
(佐牟乃神社)
- ⑤瓜生岩子記念館** 喜多方駅から北へ伸びる県道16号線2つめの信号を左折、約400m先を左折  
(喜多方 蔵の里内)



岩子(66才)と孫の祐次郎(21才)と共に撮った写真

喜多方市  
**瓜生岩子刀自顕彰会**  
**会員募集中**

「刀自(とじ)」とは、年配の女性に対し敬意を払って使う言葉です。喜多方市瓜生岩子刀自顕彰会では、岩子刀自が生涯かけて行った数々の素晴らしい功績を、喜多方市民はもちろん多くの方に知っていただくために活動しています。会では会の趣旨に賛同していただける会員を随時募集しています。詳しくは事務局までお問い合わせください。

TEL.0241-24-5257

①  
**示現寺**  
じげんじ

若い岩子が境内で遊んだお寺

喜多方市熱塩加納町熱塩字熱塩甲795

岩子の母の実家(熱塩温泉山形屋)が近くにあり、お寺の境内で遊んだと言われています。平安時代初期、空海が建てた由緒あるお寺で、総ケヤキ材の総門や細かな彫刻が施された観音堂が見事。渋沢栄一書による岩子のお墓と、町を見守るかのように座る岩子の銅像があります。



②  
**長福寺**  
ちょうふくじ

岩子が裁縫や作法を教えた場所

喜多方市岩月町大都字前田252

明治12年岩子が51才の時、当時の名主の好意によって長福寺を借り、裁縫教授所を作り、身寄りのない子を預かったり地域の娘達に針仕事や礼儀作法を教えたりしました。境内には裁縫教授所跡の記念碑が建っています。題字は版画家・斎藤清画伯によるもので、裏面には岩子の孫・祐次郎が詠んだ歌が彫られています。“幼き日祖母と住居しこの寺にむかしのまに仏みませり” 5才の時祖母の岩子と住んだ寺の仏様が昔のままに安置されていた、と大人になった祐次郎が懐かしんだ歌です。



版画家・斎藤清画伯が題字を書いた記念碑

③  
**生誕の碑**

岩子が生まれた地

喜多方市字北町 北町公園近く

岩子は文政12年(1829年)2月15日(戸籍上は5月3日)に父渡部利左衛門、母りえの長女として生まれ、小田付村で育ちました。現在の地名では喜多方市北町で、米沢街道沿いに記念の生誕碑が建てられています。



④  
**北町公園**  
(佐牟乃神社)  
さむの

穏やかな表情をした岩子像

喜多方市字北町上119

岩子の実家近くの北町公園には、昭和31年に建立された穏やかな表情をした岩子の胸像と生誕の碑があります。碑文には“是より東南約六十米の所なるも家は明治初期の火災にかかり惜しい哉今は無し”と書かれています。ここから約60m東南の場所にあった岩子の生家が火事で焼けてしまったのは惜しい、という意味です。

是より東南約六十米の所なるも家は明治初期の火災にかかり惜しい哉今は無し



⑤  
**瓜生岩子記念館**

岩子の資料を一堂に展示

喜多方市字押切二丁目109

様々な種類の蔵や蔵に関する歴史資料が展示された「喜多方蔵の里」内に、瓜生岩子記念館があります。岩子の銅像、写真、包帯くずで作った着物、岩子の功績を掲載した新聞記事などが一堂に展示されています。

喜多方 蔵の里内

TEL0241-22-6592  
開館時間:午前9時~午後5時  
休館日:年末年始

蔵の里入場料(1名)  
一般・大学生 400円  
小・中・高校生 200円



岩子の功績を後世までも

農業以外の産業が未発達だった江戸・明治時代は貧しい家庭が多く、間引き(墮胎)や棄て児が少なくありませんでした。岩子はこの悪習をなくすために一生を捧げたと言っても過言ではありません。水飴粕利用の普及、会津各地での育児会の結成、産婆研究所の設置と講習会の開催、会津若松私立病院の開設、福島県鳴会育児部の結成、「瓜生会」の立ち上げ、「婦人慈善記章の制」の国会請願等々、岩子の行動は多くの人の協力を得てとまることがありませんでした。福祉にまで手が届かなかった政治に代わり福祉事業に貢献した岩子の功績は計り知れず、郷土の先覚者として何時までも顕彰していかなければならないと思います。

かわぐち よしあき  
会北史談会長・喜多方古文書研究会会長 川口 芳昭



戦時中、包帯生産時に出た切りくずを織って作った着物。(瓜生岩子記念館展示)

# 慈愛の人 瓜生岩子

厳しく貧しい時代  
わが身をけずって人のために生きた女性

## 少女時代

### 父の急死、そして火事

瓜生岩子は、江戸時代の文政12年(1829年)に生まれました。岩子の父は喜多方の小田付で油屋を営んでいて岩子は恵まれた家庭ですくすくと育ちました。しかし9才の時、次々と不幸が起こります。父が肺炎で急死、そのあとすぐ火事で家が全焼。岩子は弟と一緒に母の実家である熱塩村の温泉宿・山形屋に引き取られて暮らすことになりました。山形屋の近くには示現寺というお寺があり、境内で遊んだりお坊さんに読み書きを習ったりして過ごしました。14才になって、医者である会津若松の叔父の家に、一人で行儀見習いに出ました。その頃の会津地方は厳しい年貢の取り立てや飢饉で人々が苦しんでいた時代でした。ここで診療の手伝いをしながら貧しさと病気で苦しむ人の姿を見ることが、岩子が将来行う活動のきっかけになったと言われています。



悲しいね。  
せつかく赤ちゃんが  
生まれても食べ物が  
なくて育てられない  
時代だったのよ



## 結婚

### 愛する人達との別れ

岩子は17才で結婚し夫婦で呉服屋を始めました。子どもも産まれ幸せに暮らしていましたが、また不幸がおそいます。夫が病気で倒れ、岩子が一人で看護、商売、育児、家事をこなしていましたが、医者の叔父、夫、岩子の母と次々に愛する人達が亡くなってしまいました。岩子は悲しみに打ちひしがれ生きる気力もなくなり、店を閉じ、4人の子どもを奉公先などへ預け、生まれ故郷へ戻ってきました。そこで小さい頃通った示現寺のお坊さんに諭されるのです。「世の中にはお前以上に不幸せな人が大勢いる。これからは困っている人の世話を生かしていきなさい」と。それからの岩子は、困り事の相談や捨て子の面倒を見て毎日を送るようになりました。

## 活動の始まり

### 敵味方の区別なく 困っている人を助けた

戊辰戦争が始まりました。会津にも敵軍が攻め入り、町は焼野原、けが人であふれていました。岩子はいても立つてもいられず戦いの中心地・会津若松へ向かい、空き家を収容所代わりにして敵味方関係なく傷の手当てをしました。クリミア戦争でのナイチンゲールと同じ行いです。これは敵軍の大將である板垣退助の心をも感動させたと言われています。会津藩が負けて戦争は終わりました。村々に預けられたさむらいの子どもの悲しさが目にあまるようになり、岩子はこの子ども達を集めて教育をしてやりたいと思いました。そして何度も何度も役所に通って許可をもらい、自分の家財道具を売ったお金で喜多方に「小田付幼学校」を建てました。

## 社会福祉の日々

### 岩子の名声は日本中へ

岩子は43才の時、「救養会所」という東京の福祉施設でおよそ1年間見習いとして働きながら、施設の運営方法を学びました。その後喜多方へ戻り、小田付幼学校の場所を長福寺に移して、女の人に針仕事を教える裁縫教授所を作りました。

岩子の熱心な活動は、国や町の有力者にも知れ渡りました。当時の福島県知事が福島市で活動していないかと岩子にすすめ、岩子は福島市でも困っている人のために働き始めました。63才の時、明治時代の有名な実業家・渋沢栄一から渋沢自身が院長をしている東京養育院での世話役を頼まれ半年ほど勤めました。同じ頃、岩子は女性で初めて国会に「婦人慈善記章の制」を設けて欲しいという請願書を出しました。しかし残念ながら採用はされませんでした。

「私は今まで多くの人を助け  
てきましたが、まだまだ足り  
ません。女性が人のために  
寄付をしたら記章をあげて  
寄付をうながす制度を作っ  
てください」と国にお願いし  
たのです



## 晩年

### 一生涯を人々のために

その後も岩子は活動を続けます。会津若松、会津坂下などに育児会、喜多方には産婆研究所を作り、各地で講習会も開きました。この講習会には、野口英世の母シカも参加し産婆の免許を取ったと言われています。会津若松にはお金がなくて医者に行けない人のための私立病院も建てました。

明治27年日清戦争が始まりました。包帯の切りくずで布を織って兵士の家族に配ったり、戦傷病院に水飴を贈ったり岩子の働きは休むことなく続きました。しかし岩子も69才、働きつめがたつて病気になるりました。病床には皇后様からもお見舞いが届いたそうです。そしてとうとう岩子は亡くなりました。人生のすべてを人のために捧げた岩子。死後7つもの銅像が建てられたのは、そのすぐれた行いをたたえられたものと言えるでしょう。

- ※1 ナイチンゲール・イギリスの看護婦。クリミア戦争の時、傷病兵を献身的に看護した。
- ※2 板垣退助。幕末の土佐藩士、政治家。自由民権運動の指導者。
- ※3 渋沢栄一。幕末の幕臣、明治、大正初期の大蔵官僚、実業家。
- ※4 野口英世。福島県猪苗代町出身。世界的な細菌学者。

## 瓜生岩子の一生

1829年	文政12年	9才	● 父急死、火災で家が焼ける。母と弟の3人で、熱塩の母の実家山形屋に身を寄せる。
1837年	天保8年	14才	● 医者である叔父のもとに見習いに行く。
1842年	天保13年	17才	● 佐瀬茂助と結婚、呉服商「松葉屋」を営む。
1845年	弘化2年	20才	● 長女つね生まれる。翌々年、祐三生まれ、更にとよ、とめと4人の子どもももうける。
1848年	嘉永1年	28才	● 叔父死去。
1856年	安政3年		● 安政の大獄
1858年	安政5年		● 大政奉還
1862年	文久2年	34才	● 夫死去(40歳)、子ども4人は奉公先へ。
1863年	文久3年	35才	● 母死去。
1864年	元治1年	36才	● 店を閉じ喜多方に転居。
1867年	慶応3年	44才	● 小田付に救養会所会津支部の設立に奔走する。
1868年	慶応4年	40才	● 戊辰戦争が始まり、会津若松で戦傷者の手当てをする。
1869年	明治2年	41才	● 小田付幼学校を建てる。
1871年	明治4年	43才	● 幼学校を閉じ、東京・深川の救養会所に学ぶ。
1872年	明治5年	44才	● 小田付に救養会所会津支部の設立に奔走する。
1877年	明治20年	51才	● 長福寺で裁縫教授所をひらく。
1879年	明治12年	59才	● 福島県知事の勧めで福島長楽寺門前に転居。各郡に教育会の設立をうながし、墮胎・棄児の防止を説く。
1887年	明治21年	60才	● 水飴の作り方、飴粕の利用法を県下で教える。
1888年	明治22年	61才	● 福島教育所の設立が認可される。
1889年	明治22年		● 大日本帝国憲法発布
1891年	明治24年	63才	● 国会に女性で初めて請願書を出す。
1892年	明治25年	64才	● 東京養育院幼童世話係長となる。
1893年	明治26年	65才	● 会津若松に私立済生病院を設置。
1894年	明治27年	66才	● 喜多方・会津坂下に育児会を設立する。
1894年	明治27年		● 日清戦争始まる
1894年	明治27年	66才	● 東京下谷に「福島瓜生会支部水飴伝習所」を設立する。
1896年	明治29年	68才	● 日清戦争の傷病兵救護として水飴30貫を寄贈する。
1897年	明治30年	69才	● 三陸津波被災者のためのバザーや募金を行なう。
			● 福島で過労のため病に倒れ、4月19日生涯を終える。
			● 熱塩の示現寺に葬られる。



● 岩子誕生



福島愛育園にある岩子の銅像